

いま目の前にある課題のクリアに 全力を注ぐ

まず、川島さんがプロのソリストを目指した
きっかけからうかがいたと思います。

川島 8歳のときに米国旅行中に病気を患っ
てほとんど視力を失いました。将来、食べて
いくため、独立立ちするためには手に職をつ
けなければならぬ。そう考えた両親からヴァ
イオリンはどうかと聞かれ、「やる」と答
えて、初めてヴァイオリンを手にしたのです。
10歳のとき、今から25年前のことです。ヴァ

イオリニストを目指すには遅すぎるスタート
でしたし、しかも視力の問題もありオーケス
トラのメンバーにはなれない。最初からプロ
のソリストを目指してやるしかない。かなり
無謀ですが、その可能性にけるしかなかった
という状況でした。

「プロのソリストになる」ためにどのような
ことをされたのですか。

川島 当時は混乱していましたし、どうした
らいいかわからない、先も見えないという状
態でした。ですからヴァイ
オリンを始めて、毎日、課題を
こなす、今日はこれが弾けるよう
になったとか、それがとてもうれし
かったです。毎日毎日、目標を立てて
それをクリアしていく。それが心の拠り
所となって、私も私の家族も救われました
し、解放されました。

当時から毎日8時間、休日には10時間も
練習されていて、それは今も変わ
らないと聞いていますが…。

川島

25年間、変わらない
です。皆さんも会社で毎
日8時間以上、お仕事されてい
ますよね。それと同じようなものだ
と思います。毎日、課題を持って練習し、
ひたすら課題をこなすことに力を注ぐ。遠い
先のことも、いま目の前にある課題をク
リアすることに全力を尽くす。それをクリア

ス ペ シ ャ ル メ ッ セ ー ジ

心の底から音楽を表現したい

かわばた・なりみち

川島 成道さん

—自分の表現したい音楽、川島成道の音楽を追求していきたい—

世界を舞台に活躍するヴァイオリニスト川島成道さんは、常にその気持ちを胸に
日々の練習やコンサートに臨んでいると言います。多くの試練を乗り越えソリス
トをめざした日々、プロの演奏家としてのモチベーションを維持する方法、ファン
や日本ユニシスへの想い、そしてチャリティ・コンサートをはじめとしたボラン
ティア活動について。さまざまな角度から川島さんにせまる最新インタビューです。

できるとやはりうれしいですね。

日々、自分なりにベストを尽くしてきたと思います。とくに「プロとして」とか「プロだから」とかいうことを思ったことはないです。

遠い先のことよりも、 いま目の前にある課題をクリアすることに 全力を尽くす。

そうした厳しい練習を毎日続けられるパワーはどこから出てくるのでしょうか。

川島 自分ができののにやらないということが納得できないのです。また、いったんやり始めて途中で投げ出すということも好きではないですね。とことんやらないと気がすまないという性格なのかもしれません。

大切なことは 「自分の音楽を表現したい」 という強い気持ちを持つこと

現在、国内・海外でコンサートを開き、またCDやDVDも次々リリースされて、いずれも大変な人気です。これについては、どうとらえていらっしゃるでしょうか。

川島 コンサートでもCDなどでも、大勢の方に聴いていただくというのは、とても力を与えられます。私の音楽への取り組みにエネルギーを与えていただいた。まだデビューする前には、暗闇の中を手探りで進んでいるように感じていましたが、デビューして多くの方々に演奏を聴いていただくようになって、大きな勇気を与えられたように感じています。日々の音楽活動の中で、プロとしてのモチベーションを維持する、あるいは高める秘訣というのがありますか。

川島 大切なことは、「心の底から音楽を表



現したい」という気持ちを持つことですね。そういう気持ちを持って日々練習すること。そうすると自分が何をどんなふうに表現したいのかを考えるようになります。音楽というのはこれが正解というものはありません。だからおもしろいとも言えます。自分の表現したい音楽を追求し続けたい。その気持ちを持ち続けることが、モチベーションを高く維持するための私なりの方法なのかも知れません。演奏するときに調子が思わしくないということはないですか。

川島 今日は演奏するのが楽しみというときには良いのですが、今日は弾きたくないということもあります。コンサートで自分の音楽を表現するためには身体も心も技術もベストな状態にないとなかなか難しい。ですから毎日しっかりと納得がいくまで練習し、体調を整えて演奏に臨むよう心がけています。

新しい楽曲にチャレンジするとき、どのようなお気持ちで取り組まれますか。

川島 もちろん新しい楽曲を始めるというときにはどう表現するか、自分なりの表現を求めて気持ちが高まります。一方、毎日練習している曲でも、自分がそれまで気がつかなかったことを見つけたり、新しい表現の仕方に気づいたり、飽きることはないですね。

昨年にはイギリスの永住権を取得され、海外でのコンサート活動を本格化されていますが、何か変化したことはありますか。

川島 国内でも海外でも気持ちの持ちようと



Kawabata Narimichi ● Profile

1971年東京生まれ。10歳よりヴァイオリンを始め、12歳で日本学生音楽コンクール入賞。その後、桐朋学園大学音楽学部を経て、英国国立音楽院大学院に留学。在学中から数多くの音楽賞を受賞し、首席で卒業。同音楽院で史上2人目となるスペシャル・アーティスト・ステータスの称号を授与される。1998年3月、小林研一郎指揮、日本フィルハーモニー交響楽団との共演で日本デビューし、現在は英国をベースにソリストとして国際的に音楽活動を続けている。CD売上は、デビュー以来、ヴァイオリン部門の第1位を継続中。8歳のとき薬害が原因といわれる難病を患い、後遺症として視覚障害を持つ。国内外を問わず、精力的にチャリティ・コンサートや福祉施設などへの訪問コンサートに取り組んでいることでも知られる。公式ホームページ「川島成道の世界へようこそ」 <http://www.narimichi.jp/>



HISTORY OF KAWABATA NARIMICHI

か演奏のスタイルとかは変わりませんね。自分の思いを、音楽を通して伝えていく。それが基本的なスタンスです。

去年はボローニャ歌劇場でのコンサートなど、1年目として良いスタートが切れたと思います。今年4月はワシントンDCでコンサートを行うことができました。また、6月には中国でのコンサートを予定しており、初めての中国公演を楽しみにしています。秋にはロンドンでの演奏会も予定しています。これから、海外での演奏も少しずつ増やしていきたいと思っています。

川島さんはファンの方を大切に、コンサートでも何曲もアンコールに応じてくださいますね。あのエネルギーはどこから出てくるのでしょうか。

川島 音楽は生きているし、コンサートも生きています。ですから生きた対応をしていくことが大切だと感じています。それはどの国のどのコンサートでも同じですね。自分の心の声に耳を傾けて、音を通してそれを伝える。そうすると観客の皆さんからエネルギーが返ってきます。伝えたいことが伝わっているなと実感しますし、皆さんから返ってきたエネルギーがそのまま演奏する私自身のエネルギーになっていくように感じます。

自分にできるなら なんでもやりたい。 ボランティアは大きな喜び

次に日本ユニシスグループと川島さんの関わりについてうかがっていきたくと思います。

川島 私のデビューは小林研一郎さん指揮で日本フィルと共演させていただいた1998年のコンサートです。それが幸運にも日本ユニシス発足10周年の記念コンサートでもあり

ました。先にお話ししたようにデビューする以前は手探りの状態でしたから、あのコンサートは忘れられません。あのとき日本ユニシスとの出会いがなかったら、現在の自分はなかったと思います。

それ以来、ずっと共感を持って支援していただいていることに、心から感謝しています。音楽家は孤独なものですから、こうした応援によって勇気も湧いてきますし、精神的にも大きな支えになっています。

年末恒例の日本ユニシスの社内コンサートは、社員の方お一人お一人と身近にお話ができるので、とても楽しみにしています。また、年が明けての目の不自由な方々もたくさん来場されるニューイヤーコンサートも、毎年楽しみに準備しています。

「日本ユニシス・プレゼンツ ニューイヤーコンサート」では当社の社員ボランティアメンバーが、一人ではなかなかコンサートに行けないという目の不自由な方の送迎や会場内外のサポートをしています。川島さんも福祉施設などへの出張コンサートやチャリティ・コンサートなど広範なボランティア活動をされていますね。

川島 一人でも多くの方に音楽を聴いて楽しんでほしいということがありますね。実は出張コンサートを思い立ったきっかけのひとつには、ニューイヤーコンサートでの皆さんのボランティア活動もありました。コンサート会場にいらっしゃることができない方たちにも音楽を届けたいと思ったのです。

自分ができること、音楽を通じてできることなら可能な限りしていきたいと思っています。実際にはそうした活動を通じて、私自身のほうが教わることもたくさんあり、大きな喜びを持って取り組んでいます。

当社はITの会社ですが、多くの方に音楽を聴いていただくという点で、川島さんと一緒に取り組んでいけることがありそうですが。

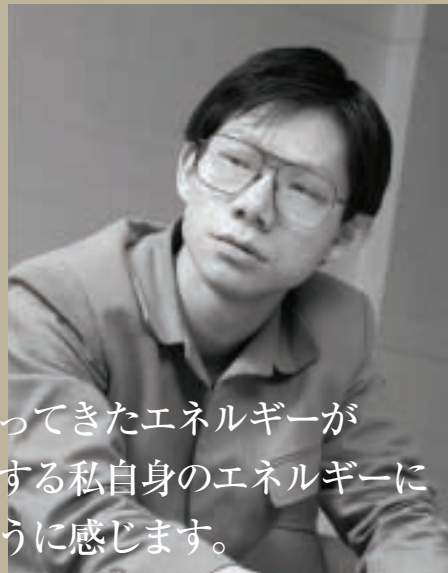


▲被災地での慰問コンサート

川島 少し前、ワシントンDCでのコンサートでは私の演奏がインターネット配信されました。翌日には聴かれた方から連絡がありました。米国・ワシントンDCで行っている演奏をイギリスでも日本でも同時に聴くことができる、世界の距離がずいぶん縮まったと感じました。こうした仕組みを利用してもっともっとすばらしいことができるような気がします。

最後に今後の展望についてお聞かせいただけますか。

川島 短期的にはやはりコンサートを充実させていくことですね。それに



皆さんから返ってきたエネルギーがそのまま演奏する私自身のエネルギーになっていくように感じます。

は毎日の取り組みがとても大切に、新鮮な気持ちを持って取り組んでいきたいと思います。

長期的には、やはり自らの音楽を表現すること、モチベーションを高く保って、川島成道の音楽表現を追求していきたい。現在、34歳ですが、40代、50代になったときどのような表現ができるようになっていくのか楽しみです。

本日は長い時間お付き合いいただき、ありがとうございました。



聞き手 = 日本ユニシス CSR推進室 中垣 由佳

スペシャル・プレゼント



http://www.unisys.co.jp/csr/report/csr2006_present.html

にアクセスしてください。川島成道さんの演奏を視聴できます。

KAWABATA NARIMICHI
and
NIHON UNISYS

1



川島成道さんと日本ユニシス

1998年3月、東京サントリーホール。川島成道さんが日本フィルハーモニー交響楽団との共演により国内デビューを飾ったこのコンサートが、日本ユニシス10周年記念コンサートであった。この出会いが機縁となり、日本ユニシスは川島さんの音楽活動に協力。現在は継続的に年間オフィシャルスポンサーを務めており、コンサート協賛のほか、川島さんの公式ホームページの制作・運用保守のサポートなども行っている。2002年発足のオフィシャル・ファンクラブ「川島成道の会」の会長には当社の元代表取締役社長 天野順一が就任している。また2001年から毎年恒例となっている「社内コンサート」は、川島さんの賛同を得て2005年からはチャリティ・コンサートとして開催されている。

2



川島成道 ニューイヤーコンサート

日本ユニシスグループでは、毎年、川島成道さんの「ニューイヤーコンサート」に協賛するとともに、日本点字図書館の協力によりそのコンサートに目の不自由な方々をご招待し、社員ボランティアが会場内外でサポートする活動を続けている。ボランティア社員は事前に誘導講習を受け、当日は最寄り駅から会場までの送迎、会場内での点字プログラム配布、座席やトイレへの誘導等のサポートを行う。この活動をきっかけに他のボランティア活動を始め社員も多く、社員のダイバーシティや社会貢献への意識高揚にも結びついている。